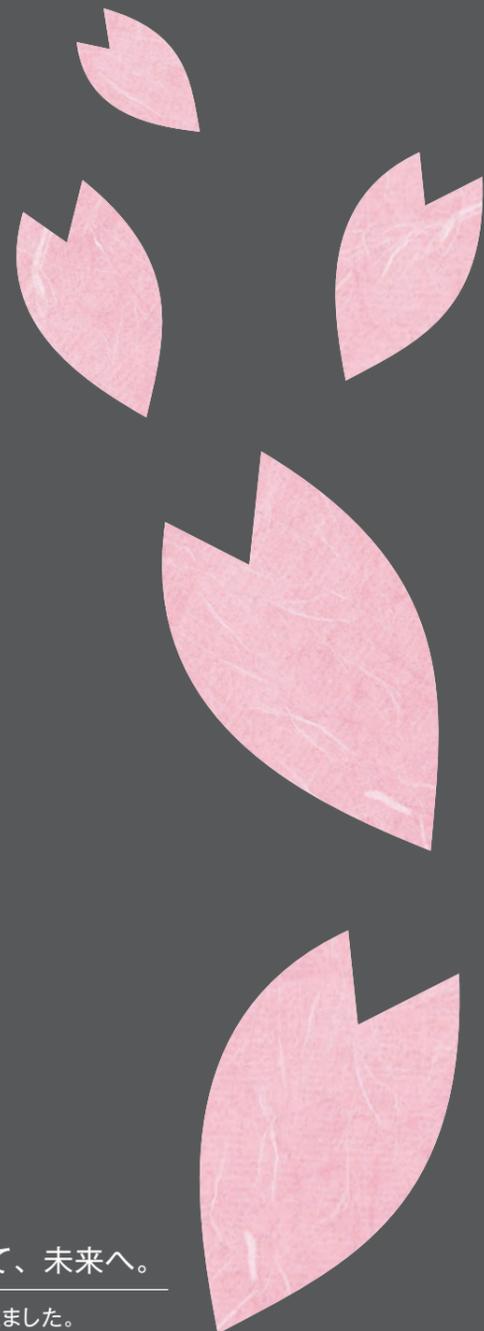


八女市制施行60周年・合併5周年記念誌



10  
20  
30  
40  
50

70  
80  
90  
100

**60**<sup>th</sup>  
Anniversary



ふるさとへの感謝と誇りと愛着。そして、未来へ。

八女市は市制施行 60 周年・合併 5 周年を迎えました。

八女市制施行60周年・合併5周年記念誌

発行 福岡県八女市  
編集 八女市市長公室  
発行年月 平成26年3月

〒834-8585 福岡県八女市本町647番地  
電話:0943-23-1111 FAX:0943-22-2186

平成26年3月

福岡県八女市

八女60の願い  
～わが故郷の過去・現在・未来～

八女市制施行60周年・合併5周年記念誌

八女市制施行六十周年・合併五周年記念誌

# 八女市制施行60周年・ 合併5周年記念誌

## 八女60の願い

～わが故郷の過去・現在・未来～

### Contents

八女の歴史 八女の黎明期	
ふるさとの文明開化（明治～大正時代）	2
夢を結ぶ交通の動脈（昭和初期）	4
激動の時代を越えて（戦中）	6
復興への誓い（戦後）	8
八女の誕生 八女市政施行元年	
地域の思いが一つに（昭和29年～）	10
高度成長への躍動（昭和40年～）	12
伝統と新たな挑戦（昭和50年～）	14
世代を越えた連帯と創造（平成元年～）	16
躍動するまちと人（平成10年～）	18
新生八女市へ（平成22年～）	20
まちの胎動	
新しい交流施設	22
暮らしの利便性	24
子育て支援	25
人の力	
新しい八女で活躍する人	26
地域おこしに活躍	27
交流と集い	
地域のお祭り	30
八女・豪雨災害と復興	32
あの時のあの人	36
八女の桜の名所	38・43
60のメッセージ	39
悠久の歴史	44
60年のあゆみ	46
歴代首長・歴代議長	50
あいさつ	51

60TH  
ANNIVERSARY

# 八女の歴史

## 八女の黎明期

明治～大正時代

### ふるさととの文明開化

福島を中心に、八女は江戸時代から交通の要衝として発展し、伝統工芸や文化が花開きました。明治時代になると、八女にも文明開化の波が押し寄せます。明治6（1873）年には学制が公布され、八女でも郵便の取り扱いが始まりました。明治中期に、立花ではみかんの栽培が盛んになり、黒木は林産物の積み出し拠点として隆盛しました。明治18（1885）年には久留米・熊本間が開通し、八女にも国道が縦断するようになりました。明治後期には、福島で電話交換が始まり、電気も灯りました。明治36（1903）年には、羽犬塚・福島間を結ぶ馬車鉄道が開通し、大正元（1912）年には矢部・黒木間に乗合馬車が走ります。大正3（1914）年には、久留米・福島間を結ぶ電車が、同5（1916）年には黒木・山内間を結ぶ機関車の「黒木軌道」が開通。大正6（1917）年には上陽の星野川に、2連アーチの美しさで知られる寄口橋が架けられました。

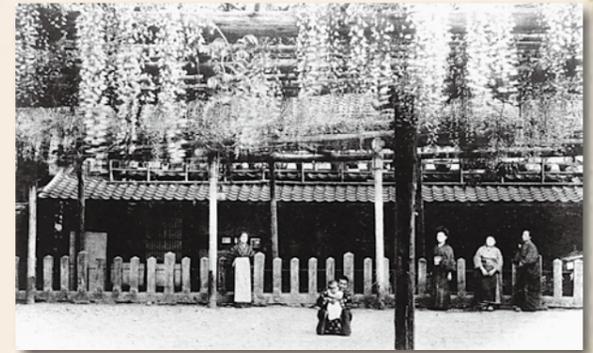
大正5（1916）年には、当時皇太子だった昭和天皇が旧八女郡で行われた陸軍特別大演習を視察に来られた際、立花の下辺春小学校の児童らがお茶を献上するために、茶摘みの奉仕作業を行いました。



寄口橋の架設風景  
橋本勘五郎氏が作った皇居の奥二重橋を再現したものと伝えられる。(上陽)



たばこ元売捌所 大正初期  
たばこ元売捌所黒木支店が稲荷町と呼ばれた後藤酒造の東側通りに設けられていた。(黒木)



黒木大藤  
藤棚を隔てて当時の吉泉旅館が見える。(黒木)



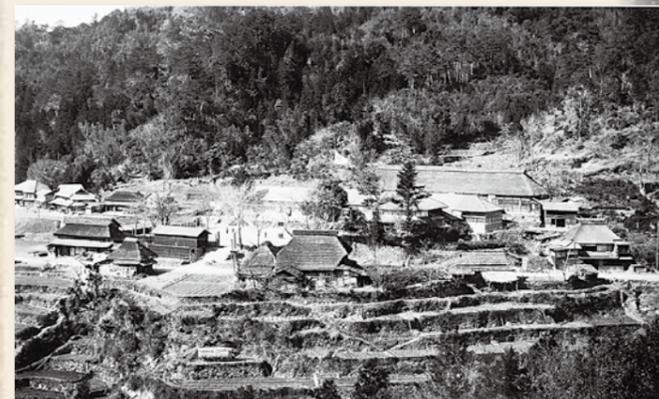
大正時代の風流の様子 (星野)



献上茶の茶摘み 大正5（1916）年  
昭和天皇が八女で行われた陸軍特別大演習を視察に来られた際、お茶を献上することになり、下辺春小学校の児童が茶摘みの奉仕作業をした時の記念写真。(立花)



明治44年陸軍大演習時に展示された石人石馬 (八女)



大正時代の星野小学校 (星野)



日向神 (矢部)

昭和初期

# 夢を結ぶ交通の動脈

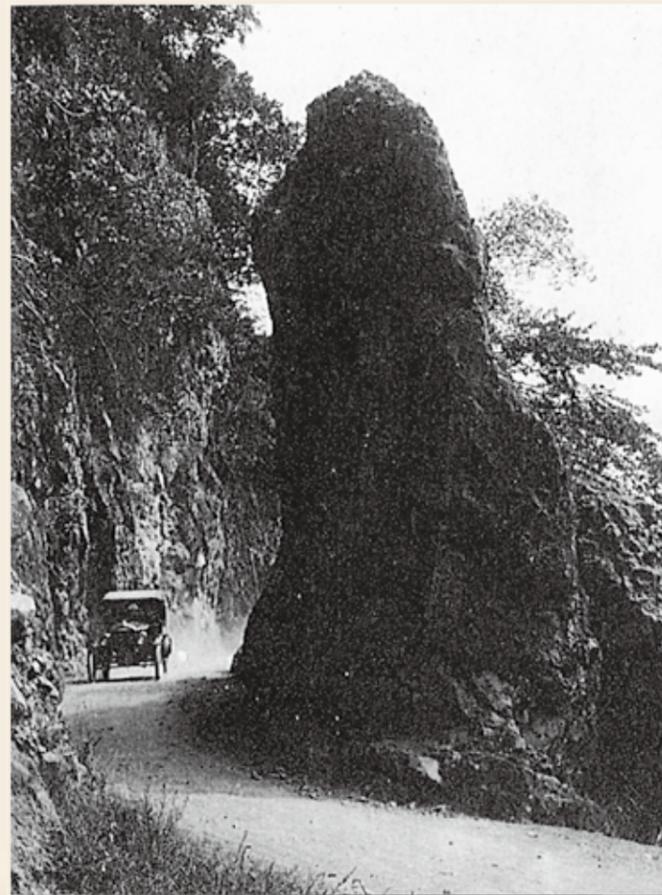


創業まもないころの堀川バス本社（八女）

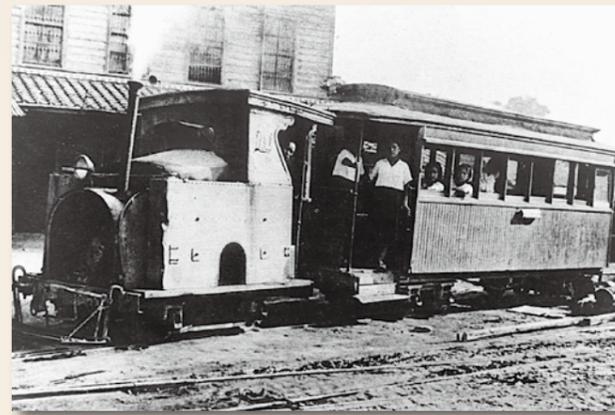
大正時代の末期になると、八女にも自動車の姿が見られるようになりました。大正11（1922）年には、福島で12～13台あったとされ、主に当時操業し始めたタクシー業者が保有していました。昭和2（1927）年には、上陽に最初のトラックが走ったと記録にあります。翌年の昭和3（1928）年には、福島・合ノ原間を結ぶ乗合自動車、昭和6（1931）年には、黒木と久留米を結ぶ堀川自動車の久留米線も開通しました。昭和10（1935）年頃から星野にも乗合自動車走り始め、同15（1940）年には長野・浦間を結ぶ路線も開通しました。少しずつ交通網が充実していき、今に続くモータリゼーションの時代がスタートしたのです。

昭和11（1936）年には、国鉄矢部線の設定が決定しました。一方、大正5（1916）年から昭和15年まで「黒木軌道」を走り続けた南筑軌道の機関車は、ボンボンと音を立てて走るのので、“ボンボン軌道”の愛称で親しまれていました。

文化面の話題としては、昭和6年に久留米出身の坂本繁二郎画伯が、福島に定住することになりました。昭和11年には八女近在の画家たちが画伯を迎えて「新人会」を結成しました。昭和3年には、後征西將軍 良成親王のお手植と伝えられた「黒木の大藤」が国の天然記念物に指定されています。



（昭和初期）こうもり岩のそばを走る幌つきバス（星野）



ボンボン軌道（昭和初期）  
大正5年から昭和15年まで走り続けた南筑軌道の機関車と客車。（黒木）



中川内のお宮を立て直す時の石突（上陽）



宮の尾橋 皇紀2600年祝典稚児行列（矢部）



千間土居  
元禄8（1695）年に築かれたこの堤防には補強のために竹木が植えられた。（立花）



昭和10年頃の星野金山 金山寮と乗合自動車（星野）



国鉄C11形蒸気機関車試運転 筑後福島駅（八女）



横山村八重谷に建設されたタケノコ缶詰工場（上陽）

戦中

# 激動の時代を越えて



北川内尋常小学校の授業風景  
昭和14年2月卒業記念に撮影。食糧難で物が無い時代、わら草履や下駄で通学した。(上陽)



昭和15年老松天満宮での「武運長久祈願」(矢部)



家庭防空訓練(立花)



欣修塾(きんしゅうじゅく)

昭和12(1937)年、欣修塾は戦中に機密で進められた軍需工場であった。10代から20代の女性が動員され、弾頭部分の製造に従事した。(立花)



昭和初期にアメリカから始まった大恐慌は、八女の経済にも大きな影響を与えます。住民たちが自助努力でそれを乗り越えた頃、今度は昭和12(1937)年の日中戦争の勃発に端を発する戦争の時代が訪れます。同年に立花にできた欣修塾は、機密で進められた軍需工場で、若い女性が動員され、爆弾の弾頭部分の製造に携わっていました。

昭和16(1941)年に太平洋戦争が始まると、戦時色はさらに強まっていきます。出征兵士の見送り、神社での武運長久祈願、英霊の出迎えや地域をあげての葬儀、学校での軍事訓練など、当時の写真が数多く残されています。岡山飛行場の建設、田川の炭鉱などへ、労働者や学生が勤労奉仕に駆り出されることも多くなりました。中でも、炭鉱での作業はダイナマイトで爆破させた瓦礫を集める危険なものだったといえます。

戦争末期には、福岡市や久留米市、大牟田市などで空襲があり、艦上機による機銃掃射で亡くなった方もいました。八女でも、盛んに防空訓練が行われるようになりました。そして、昭和20(1945)年8月15日に戦争は終わり、八女の人々も新しい時代を迎えることになりました。



紀元節 奉安殿(上陽)



勤労報国隊として田川の炭鉱へ戦時中、召集された。これは、坑道に入る前に撮った北川内町と横山村の報国隊員の記念写真。当時炭坑での働き手がいなかったため、各地域から働き手を呼び寄せていた。

常に危険と隣り合わせで、トロッコで坑道を下りて行き、ダイナマイトで爆破させた瓦礫をえびじょうけで集める仕事であった。仕事が終わって穴から出ると、目以外は真っ黒であった。(上陽)



戦死者葬儀の様子(矢部)



松崎尋常小学校 出征軍人村葬(上陽)

# 戦後 復興への誓い



昭和23年頃の白木本山地区での竹の出荷風景  
当時は、ミカン園も戦中で荒廃しており、竹が主な収入源となっていた。(立花)

**終**戦直後の八女で特筆すべきは、矢部線の開通が挙げられます。沿線に軍事施設や工場が多かったため、戦争が始まってからも建設が続けられ、昭和20(1945)年12月に羽犬塚・黒木間が開通。終戦後初めて開通した路線になりました。

戦争のため荒廃していた山や農地も再生され、茶畑などの開墾も進みました。昭和25(1950)年には電気照明による抑制栽培を行う電照菊も始まりました。この年「五条家文書」(附指定八幡大菩薩旗)が国の重要文化財に指定されました。

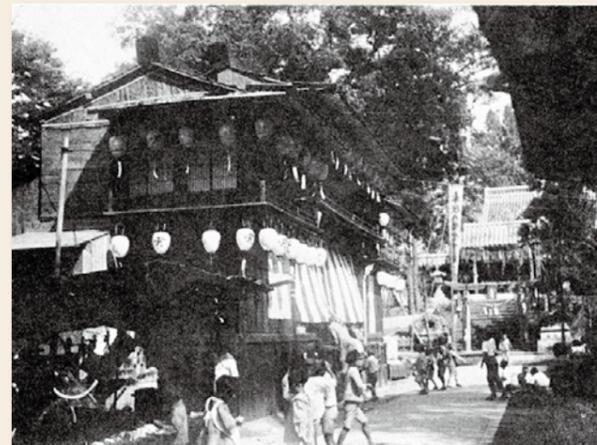
昭和28(1953)年には、福岡県南部の豪雨により、矢部川で未曾有の大洪水が起き、各地で橋の流出やダムが決壊、道路の寸断などが起こりました。旧八女郡の被害は、死者27名、全壊・流出家屋154戸にも及び、社会生活全般に大きな痛手を与えました。しかし、人々はすぐさま復興と新たな街づくりへ取り組み始めました。



矢部村大運動会  
戦後初めて行われた運動会は仮装行列を交えて大いに盛り上がった。(矢部)



昭和23年7月1日、横山村大字上横山の一部(藤木、岩下)と下横山(轟、黒岩、仏尾、桑川内、尾久保、木浦)が分村して北川内村に合併した。  
写真は、轟・黒岩で、北川内村との合併を記念してお祝いが行われたときに撮影されたもので、場所は轟区消防自動車格納庫の前で、仮装行列のようなことをして楽しんだ。(上陽)



昭和26年公開八女福島の燈籠人形屋台風景(八女)



矢部中学校の茶畑開墾(矢部)



花宗堰大瀑布  
矢部川で未曾有の大洪水が起きる。福岡県南部に大豪雨、矢部川は大氾濫し、ほとんどの橋は流失し家屋倒壊・水田灌水・道路決壊・交通途絶等甚大な被害となった。(八女)

昭和28年の大洪水と、鉾津ダムの決壊  
昭和28年6月26日、旧八女郡下2町26カ村で、死者27人、全壊家屋(流失を含む)154戸、橋梁流失、道路・堤防等の決壊、家屋浸水、農作物の罹災など、社会生活の全般にわたって、未曾有の被害をもたらす大洪水が発生した。星野村でも被害は甚大で、千々谷鉾津ダムが決壊し、死者14人を出す。(星野)



昭和29年4月1日

# 八女市制 施行元年

成長を続ける八女市



西鉄福島線（三井電車）の電車が撤廃される

三井電車と呼ばれて親しまれ、土橋と日吉町（久留米市）の間を結んでいた西鉄福島線が、国道3号改良工事に先立つ昭和33年11月26日をもって廃止され、代わって西鉄の大型バスが運行されることになった。（八女）

昭和29年～

## 地域の思いが一つに

日本の復興が進み、「もはや戦後ではない」といわれた昭和30年前後は、八女周辺でも町村合併の大きな動きがありました。昭和29（1954）年4月1日に、福島町、川崎村、忠見村、岡山村が合併し八女市が誕生します。そして、坂本繁二郎画伯が名誉市民に推挙されました。このあと坂本画伯は昭和31年に文化勲章を受章されています。同年、黒木町が豊岡村、串毛村、木屋村、笠原村を、さらに昭和32（1957）年には大淵村を編入し、新しい黒木町が生まれました。昭和30年には、光友村、北山村、白木村、迎春村が合併して立花町が、同33（1958）年には北川内町と横山村が合併して、上陽町が誕生しました。

昭和30（1955）年には、大水害で流出した矢部川橋が完成。近代的な銀色の橋脚が話題になりました。昭和31（1956）年には、八女市で福岡県内初となる小学校全校完全給食が実現しました。昭和35（1960）年には、矢部村の日向神ダムが完成し、観光遊覧船が就航しました。昭和36（1961）年には、黒木町、矢部村、星野村の三森林組合で県下初の「八女森林組合共販所」を設立。各市町が個性を発揮しながらも、一体化を図る試みが始まりました。



昭和30年頃の土橋商店街（八女）



矢部川橋渡り初め 昭和30年9月

昭和28年の大洪水で流出したものを二年間の歳月をかけて完工し、当時としてはトラス式の銀色の鉄橋は、近代的な光景であった。また、九州の大動脈でもある国道3号での催しに、式典には200名にのぼる参加者があった。（総工費は、当時の金額で6300万円）（立花）



日向神ダム建設（笹又地区）により校舎水没のため飯干小学校が移転  
ダム水没前の笹又地区（矢部）



北川内町と横山村の合併調印式 昭和33年

議員が見守る中、当時の小川百助町長（左）と井上常雄村長（右）が署名し上陽町が誕生した。（上陽）



日向神観光遊覧船就航 昭和35年（矢部）



県道八女・添田線全面開通 昭和37年

浮羽・日田方面への交通が便利になった。（星野）



市制施行10周年記念 昭和39年

小学校陸上大会が福島小学校グラウンドで行われ、市内各小学校児童が参加した。（八女）



木材をひく様子

昭和30年代、当時、林業が盛んであった。「きんま（木馬）」とは、木材搬出用のソリのことで、馬や牛に木馬を曳かせていた時代であったが、今では機械化され木材搬出用としてはその姿を見ることはできない。



学生による奏楽の見送り 昭和30年代（矢部）

# 躍動 高度成長への

昭和40年



昭和42年4月8日 国道3号バイパス開通 (八女)

市庁舎完成 昭和45年 (八女)



九州縦貫自動車道八女インターチェンジ開通  
昭和48年11月16日 (八女)

昭和39 (1964) 年に東京オリンピックが開催され、東海道新幹線も開通。日本は本格的な高度経済成長の時代に突入します。八女市周辺でも、交通機関の拡張や大規模な開発が相次ぎました。昭和41 (1966) 年には、上陽町の仏尾地区にバス路線が運行を始めます。翌42 (1967) 年には、大島・矢部川間を結ぶ国道3号バイパスが開通しました。昭和48 (1973) 年には、待望の九州縦貫自動車道の八女インターチェンジが開設され、その後、八女市と九州各地や本州とを結ぶ重要な玄関口となりました。

産業分野では、八女市の忠見地区の丘陵地に大規模な茶畑を造成する県営開拓パイロット事業が昭和48年に完了。現在も「八女中央大茶園」として、「茶のくに八女」のシンボリックな場所となっています。黒木町でも、傾斜地を切り開いたみかん畑の造成が進みました。上陽町の上陽産業株式会社など、企業の誘致も積極的に行われています。

一方、星野村在住の山本達雄氏が、広島から持ち帰って守っていた「原爆の火」が、役場内の「平和の塔」に転火されたのも昭和43年のことでした。



八女市広報創刊 (5月号)  
昭和40年5月 (八女)



仏尾線バス開通式

昭和41年12月24日、堀川バス仏尾線の開通式。地元の人たちの強い要望が実ったもので、開通まで110世帯600人の人たちは、およそ7kmの道を歩いて北川内に来ていた。

開通式の後にバス3台と乗用車10数台が祝賀会場である下横山小集会室に向かったところ、地元の人たちが2階の窓や屋根から紙吹雪を降らせバスを歓迎した。(上陽)



第21回全国茶業大会へ向け出品茶園の管理指導  
昭和41年11月 (黒木)



第21回全国茶業大会 昭和42年10月16日  
茶産地案内 (星野)



上陽産業株式会社が設立(工場誘致第1号) 昭和42年(上陽)



立花町立体育館竣工 昭和42年12月8日 (立花)



平和の塔が完成  
昭和43年8月6日

役場前に建設された平和の塔に原爆の火を山本達雄氏宅から転火する。(星野)



八女地区県営農地開発パイロット事業完了  
昭和48年10月23日 (八女)

# 新たな挑戦

昭和50年

伝統と



八女福島の燈籠人形が国の重要無形民俗文化財に指定  
昭和52年（八女）

昭和時代後期には、八女市周辺の伝統文化に新たな光が当てられました。昭和50年には田崎廣助画伯が文化勲章を受章されています。昭和52（1977）年には、江戸時代後期からの伝統を持つ「八女福島仏壇」が国の伝統的工芸品に、江戸中期に始まったとされる「八女福島の燈籠人形」が国の重要無形民俗文化財に「松延家住宅」が国の重要文化財に指定されました。昭和59（1984）年には、江戸末期頃、九州各地から出稼ぎにきた人々により唄われ始めたとされる茶摘み唄を競う「八女茶山唄日本一大会」が黒木町でスタートしました。「星のまつり」「じょうようまつり」など、地域の祭りがスタートしたのもこの頃です。

昭和51（1976）年には、立花町がほたる保護条例を施行し、町内全域を「ほたる保護区」に指定。昭和53（1978）年には、北部九州最大の前方後円墳、岩戸山古墳を中心とした、八女丘陵上の主だった古墳が「八女古墳群」として国の史跡に指定されました。

昭和54（1979）年には、大牟田市・立花町・黒木町という福岡県南部のみかん産地を縦貫するオレンジロードが開通しました。その一方で、国鉄矢部線が昭和60（1985）年に40年間の歴史に幕を閉じ、お別れ式典が敢行されました。



八女福島仏壇が国の伝統的工芸品に指定 昭和52年（八女）



星野村総合体育館竣工 昭和52年（星野）



岩戸山古墳

昭和30年12月23日に国の史跡に指定された。昭和53年3月24日付けで、史跡の統合・追加・名称変更が行われ、指定名称が「八女古墳群」になりました。（八女）



八女茶山唄日本一大会を初めて開催 昭和59年（黒木）



国鉄矢部線が廃止され、お別れ式典を実施 昭和60年（八女）



「黒木町音頭」レコード完成（歌 三波春夫） 昭和58年（黒木）



市制施行30周年記念式典 昭和59年（八女）



広域基幹林道奥八女線の開通 昭和60年（矢部）



柚の大吊橋 昭和63年（矢部）

# 世代を越えた 連帯と創造

平成元年

「星の文化館」が開館 平成3年（星野）

時代が平成に変わってから、新しい地域のイベントが数多くスタートしました。平成元（1989）年には、星野村の村制100周年を記念して「九州和太鼓フェスティバル」、平成2（1990）年には、立花町で「第1回立花町観梅会」、平成5（1993）年には、上陽町で「全日本きんま選手権」、平成7（1995）年には、「万灯流し」が始まりました。

地域の文化や産業を紹介する施設もたくさんできました。星野村には、平成3（1991）年に、九州最大級の天体望遠鏡を備えた「星の文化館」、平成6（1994）年には、「茶の文化館」が開館し、平成7年、原爆の火を守る「平和の塔」が星のふるさと公園に建立されました。八女市には、平成8（1996）年に、「手すき和紙資料館」が開館しました。

産業では、昭和60（1985）年にスタートした立花町のキウイ栽培が、生産量日本一を誇るようになったことが挙げられます。平成2（1990）年には、「立花ワイン株式会社」が設立され、平成7年には宮内庁に献上されました。

平成5年には、矢部村で自然体験交流学校「おおそま自然塾」、平成6年には、黒木町で「山村塾」がスタートするなど、都市と農山村住民との交流によって地域の活性化を図る試みが始まりました。



全日本きんま選手権大会（上陽）



村制100周年記念企画として「第1回九州和太鼓フェスティバル」を開催 平成元年（星野）



「学びの館」（旧隈本家住宅）開館 平成4年（黒木）



杉の里自然体験交流学校「おおそま自然塾」開校 平成5年（矢部）



第1回上陽町万灯流し開催 平成7年（上陽）



八女市教育研究所開所式 平成元年（八女）



八女市平和の歌ができる 平成2年（八女）



天皇后両陛下、伝統工芸館をご視察 平成4年（八女）



平和の広場に「平和の塔」建立 平成7年（星野）



五木寛之氏初めての郷里講演 平成8年（立花）

# まちと人 躍動する

平成10年



八女福島の白壁の町並みが重要伝統的建造物群保存地区に選定  
平成14年（八女）

平成10年代になると、伝統的な町並みや地域のコミュニティを見直そうという動きが起きました。平成14（2002）年には、「八女福島の白壁の町並み」が重要伝統的建造物群保存地区に選定され、「あかりとちゃっぼん」「雛の里・八女ほんぼりまつり」「白壁ギャラリー」など、町並みを舞台にしたイベントも活況を呈してきました。平成13（2001）年には、10人もの職人の手作業で作られる「八女提灯」が伝統的工芸品に指定されました。

平成11（1999）年に、黒木町の人形浄瑠璃の公演を行う「旭座人形芝居会館」、平成12年に、矢部村に5年ごとに奉納される神事芸能、浮立を紹介する「八女津媛浮立館」が開館するなど、伝統行事を継承する動きも盛んになりました。

一方、平成10（1998）年、八女市に地ビール工房などを備えた「べんがら村」、平成17年、立花町には地元生産者による食材が充実した「道の駅たちばな」、平成18（2006）年、矢部村に山村留学センター「おおそま自然の家」が開館するなど、にぎわいを創出する施設や地域交流施設も数多く誕生しました。平成18年には、八女市と上陽町が合併し、新生八女市が第一歩を踏み出します。



八女提灯が国の伝統的工芸品に指定 平成13年（八女）



旭座人形芝居会館竣工 平成11年（黒木）



池の山荘に星の温泉館「きらら」が開館 平成13年（星野）



とびうめ国民文化祭上陽町絵本大会 平成16年（上陽）



道の駅たちばなオープン 平成17年（立花）



八女津媛浮立館が開館 平成12年（矢部）



脆大橋完成 平成14年（上陽）



国道442号竹原峠道路、12月に全線供用開始 平成17年（矢部）



上陽町が八女市と合併 平成18年（上陽）

# 新生八女市へ

平成22年

## 八女市開庁式



新八女市のキャッチフレーズ「茶のくに八女・奥八女」がかかげられた会場には、関係者約150人が出席



本庁で開庁式 平成22年2月1日  
新八女市誕生を祝い、くす玉が割られる。



八女市役所立花庁舎開所式

八女市、上陽町、黒木町、立花町、矢部村、星野村は、もともと旧八女郡を構成しており、未来に向けて地域の活性化を進めるために広域的な連携を求める声が次第に高まっています。平成18（2006）年10月に、まず上陽町が八女市と合併。続いて、平成22（2010）2月に、黒木町、立花町、矢部村、星野村と合併し、新生八女市が誕生。旧町役場、村役場は支所として開所することになりました。合併後の市域面積は482.53平方キロメートルとなり、福岡県内では北九州市に次いで2番目に大きい市となりました。

八女市の新しいキャッチフレーズは、「茶のくに八女・奥八女」。魅力ある観光地を目指すため、「茶のくに八女のおもてなし宣言」も発表されました。平成22年10月には、「全国茶品評会」の玉露の部で、上陽町の金子守さんが農林水産大臣賞を受賞。八女茶は10年連続で玉露の部の日本一を達成し、合併に花を添えました。



八女市役所黒木総合支所開所式



八女市役所矢部支所開所式



八女市役所星野支所開所式



八女市観光コンセプト「茶のくに八女・奥八女」により、市内で活躍中の女性による「おもてなし宣言」。平成22年



西日本短期大学附属高校が6年ぶり5回目の夏の甲子園大会出場を決め、市役所を訪問。3回戦まで進み、大きな感動を与えてくれた。平成22年



今福工業団地に「ホクト株式会社」福岡八女きこセンター（九州最大規模）が竣工された。平成22年



タキロンポリマー本社・工場が今福工業団地に進出。平成23年



九州工業大学と包括的連携協定を締結。その後八女バンブーバレー実証研究センターが旧迎春中学校跡地に開設。平成23年



大韓民国巨済市との姉妹都市協定締結 平成24年



福岡市天神の渡辺通りにアンテナショップ「八女本舗」がオープン。平成25年



NHK福岡発地域ドラマ「苦くて甘いー希望の茶ー」放送 平成25年

# 新しい交流施設

新生八女市に誕生する文化・スポーツ施設、情報発信の拠点を紹介します。

## 主な交流拠点施設



- ① 八女市民会館「おりなす八女」 ② 八女観光物産館「ときめき」 ③ 八女市子育て支援総合施設「やめっこ未来館」
- ④ ペんがら村 ⑤ 岩戸山歴史文化交流館（仮） ⑥ 道の駅たちばな ⑦ ほたと石橋の館 ⑧ 茶の文化館
- ⑨ グリーンピア八女 ⑩ 八女東部スポーツ公園「グリーンフィールド八女」 ⑪ 杣の里溪流公園 ⑫ 夢たちばなビレッジ
- ⑬ 大淵地区地域間交流施設（仮称） ⑭ 矢部地区地域間交流施設（仮称） ⑮ ふるさとわらべ館 ⑯ 星の文化館

新生八女市のシンボルとして、平成23（2011）年6月に開館した総合文化施設。本格的なコンサートや演劇に対応した「ハーモニーホール」、小規模イベント用の「はちひめホール」、会議や講演などに使える研修棟や交流室などから成り、八女公園を臨む桜カフェもあります。

施設内はバリアフリーで、ホールには車いす席や親子席、授乳室なども完備しています。ピアノの最高峰とされるベーゼンドルファーとスタインウェイが置かれており、内外の著名ミュージシャンによるコンサートが開かれています。



交流を目的とした多機能文化施設

## 八女市民会館 おりなす八女



八女市の多彩な魅力を発信

## 八女観光物産館 ときめき



八女市の情報発信の拠点として、平成24（2012）年4月に開館しました。伝統工芸品や特産品、銘酒など八女全域の特産品を一堂に集めた物産館、地域の魅力を発信・提供する観光案内所、地元の食材にこだわった郷土食の店があります。八女伝統工芸館に隣接しており、福島地区の街並み散策、さらには広域観光の足がかりとして人気を集めています。



天然芝コートの多目的グラウンド

## 八女東部スポーツ公園

## グリーンフィールド八女



黒木町のグリーンピア八女内に平成25（2013）年11月にオープンした、天然芝（夏芝・冬芝）のコート2面のスポーツ公園。プレオープニングイベントとして、9月にサッカー日本代表OBチームと、八女選抜チームの試合も行われました。サッカーやグラウンドゴルフを中心に、芝生を痛めない催しであれば、市民のレクリエーションなどに広く活用することができます。

全国有数の埋蔵文化財の宝庫、八女の魅力を発信

## 岩戸山歴史文化交流館（仮称）



教科書などにも掲載されている全国屈指の古墳で、ファンも多い岩戸山古墳の魅力を広くアピールするために、関連資料の保存・展示を通して市内外の人びとが集い、交流できる施設を整備します。この施設では、岩戸山古墳や石人石馬などの貴重な史跡や文化財を紹介するとともに、市内の観光拠点への案内等を行う北の玄関口となります。工事の完了は平成26年6月末日を予定し、平成27年11月の開館を目指します。

八女市子育て支援総合施設

## やめっこ未来館



第4次八女市総合計画では「安心して子どもを産み育てることができるまちづくり」を掲げて、子育て家庭への支援と保育サービスの充実を重点的に推進しています。

「子育て総合支援施設整備事業」は、公立保育所としてのサービス提供とともに、市全域の子育て支援サービスを提供・連絡調整する機能を持つ施設として整備します。

旧小学校校舎をスポーツ合宿などに活用

## 大淵地区地域間交流施設（仮称）



閉校した黒木町の大淵小学校校舎を、子どもからお年寄りまで幅広く利用できる宿泊型交流施設及び避難所を兼ねて整備。グリーンフィールド八女に集まるサッカーチームのスポーツ合宿などに活用してもらいます。地域情報の発信場所として、文化歴史を紹介するコーナーを設けるほか、自然や農林業など地域の特性を活かしたイベントも企画。林業が盛んな地域柄を反映した八女産材を使用し、木の温もりが感じられる施設とします。

周遊観光やアウトドアレジャーの拠点をめざす

## 矢部地区地域間交流施設（仮称）



自動車による八女市内周遊観光客や登山、キャンプ、釣りなどアウトドアレジャー客に対応するため、国道沿いの駐車場やトイレ等を備えた休憩・交流施設を整備します。地域の食材を使ったレストランや特産品の販売施設、イベントスペース、観光情報提供スペースなどを設け、施設自体が魅力的な観光スポットとなることを目指します。こちらも、八女産材をふんだんに使用した施設とします。

## 緊急情報も提供するコミュニティFM「FM八女」

平成24年に開局されたコミュニティFM「FM八女」は、市民参加型の番組を放送するだけでなく、防災情報伝達システムとしての役目も担っています。八女市では、全戸に緊急告知防災ラジオを無償配布しており、電源を切っていたり、他の放送局を聴取していたりする場合でも、緊急時にはFM八女の放送に切り替わり、災害や防災に関する緊急情報を素早く提供する仕組みになっています。



## 玄関から目的地まで送迎する予約型乗合タクシー



八女市では、自宅の玄関から目的地まで、複数の利用者が乗り合いで活用できる予約制・低料金のタクシーを運営しています。公共交通の空白地をカバーする交通弱者対策として高く評価され、運営にあたる八女市地域公共交通協議会は、地域公共交通優良団体として、平成25年度に福岡県では初めて国土交通大臣表彰を受けました。

## 九州自動車道へのパークアンドライド駐車場を開設

福岡都市圏とのアクセス強化により、定住促進を図ることを目的として、平成24年3月、九州自動車道の八女インターにパークアンドライド（バス停利用者専用）駐車場がオープンしました。八女インターバス停と天神・博多駅を結ぶ高速バスの定期券を購入した方は無料で駐車場を使用できるほか、定期券や回数券の割引販売もあり、利用者は順調に伸びています。



## 地域振興につながる国道442号バイパスの全面開通



平成25年5月、八女市の国道3号大島交差点から納楚までの1.16キロが完成し、25年の歳月をかけて国道442号バイパスが全通。大川市から納楚まで、バイパスの総延長は17.42キロとなりました。これにより、区間内にある大川市、大木町、筑後市、八女市の連携が深まり、県南広域地域での産業・経済の発展や雇用の創出・拡大、定住促進に寄与することが期待されています。

## 光ファイバー網による情報通信基盤の整備

八女市では、国の補助事業を活用して光ファイバー網による情報通信基盤の整備を進めています。インターネットが使えなかったブロードバンドゼロ地域を解消し、防災や行政サービスなどに関する活用も図っていきます。



## 児童・生徒が学習に集中できる環境を整備 市立小中学校空調設備整備事業

近年の気候の温暖化の影響によって室温が高くなり、小・中学校の夏期学習は非常に厳しい環境で行われていました。

八女市では、平成25年度に市内全小・中学校の普通教室へ空調設備を設置し、児童・生徒が学習に集中できる環境の整備を図りました。



## 市内の店舗、施設、企業が子育て家庭を応援 パパ・ママ子育て応援ショップ事業



平成26年度から実施する、地域、企業及び行政が一体となって子育て家庭を応援する事業です。中学生修了までのお子さまを持つご家庭が「やめっこ子育て応援カード」に登録すると、「応援ショップ」として登録されている八女市内の店舗、施設、企業から、「やさしいサービス」「便利なサービス」「お得なサービス」の支援を受けることができます。



## 健やかな成長を願い、赤ちゃんにお祝金を支給 やめっこ夢祝金

定住人口の確保と出生率の改善を目指して、八女市では特色ある子育て支援事業を実施しています。その一つの「やめっこ夢祝金」は、八女市民の誕生を祝福し、赤ちゃんの心身ともに健やかな成長を願ってお祝い金を支給する制度です。

八女市では平成20（2008）年10月から、所得制限や医療費の一部負担を設けている県の事業に独自の支援策を加え、小学校就学前までの乳幼児の医療費無料化を実施しました。平成24年4月1日以降は、小・中学生の入院医療費を無料とし、助成を拡大。安心して医療を受けられる環境を整備しています。

## 平成24年度から小・中学生まで助成を拡大 こども医療無料化



## 中学生までのお子さまの転入費用の一部を支援 やめU I ターン子ども応援手当

平成26（2014）年度から、八女市では転入された中学生までのお子さまの小・中学校、保育所、幼稚園などにかかる費用の一部を援助する「やめUIターン子ども応援手当」を支給。八女市へのUIターンを希望するご家族を応援していきます。

# 新しい八女で活躍する人



ロンドンパラリンピック  
ゴールボール金メダリスト  
安達阿記子さん

Photo by ICHIKAWARYO/studioAFTERMODE

## 八女市民栄誉賞 第1号!

### 団体競技史上初の金メダルを獲得



Photo by ICHIKAWARYO/studioAFTERMODE



Photo by ICHIKAWARYO/studioAFTERMODE



Photo by ICHIKAWARYO/studioAFTERMODE

Photo by ICHIKAWARYO/studioAFTERMODE

八女市出身の安達阿記子選手が所属するゴールボールの日本チームが、「2012ロンドンパラリンピック」で団体競技史上初の金メダルを獲得しました。安達選手は、平成19(2007)年に全日本のメンバーに入り、翌20(2008)年の北京オリンピックに出場。2度目のオリンピックで栄冠を手に入れました。

「信じていれば、夢は必ずかなう」。安達選手の金メダルは、豪雨災害を受けた八女市の人たちに希望を与え、「八女市民栄誉賞」の第1号に選ばれました。安達選手は今、パラリンピック史上初の団体競技連覇を目指して、海外遠征など忙しい日々を送っています。

### Interview

#### 「人には無限の可能性があり、夢は必ず叶う」

中学2年で視覚障害になった私は、20歳を過ぎてゴールボールに出会うまでスポーツから離れていました。視覚障害の度合いはさまざまなので、ゴールボールでは条件を平等にするためアイシェードをつけます。最初は真っ暗の状態に恐怖心を憶えましたが、ボールを追いかけているうちに初めてスポーツを真剣に行う爽快感を得ることができたのです。



コーチや先輩方に恵まれて、目標を叶えていく喜びを知り、北京オリンピックにも出場できたのですが、結果は惨敗。その時感じたのは、全員の思いが一つになるこ

との大切さでした。それから、金メダルを獲りたいと心の中で願うだけでなく、練習中も合言葉のように口に出し、常に自分たちの目標を確認し続けました。

八女の方たちには、最初に世界大会に出た時から、さまざまな支援をいただけてきました。パラリンピックの前哨戦の最中に八女市で水害があったことを知り、良いニュースを報告し、少しでも八女の人たちに元気になってもらいたいと思い、決勝に臨みました。そして、すべきことをやり遂げ、結果を出すことができました。

八女に帰って、皆さんからいただいた、「おめでとう」「ありがとう」の言葉に、すごく勇気づけられました。「人には無限の可能性があり、夢は必ず叶う」。この思いを胸に、再び世界の頂点を目指していきます。

# 地域おこしに活躍

おいしい直販・やさしい交流・たのしい体験  
直売所日本一に輝いた「道の駅たちばな」



「道の駅たちばな」は、平成17(2005)年、地元生産者が育てた野菜や果物、米を、一番おいしい時に味わってもらおう直売所としてスタート。竹の子、イチゴ、梅、みかん、キウイなど、旬の味覚が並び、温かな交流のある直売所として、たくさんの人が訪れます。平成23(2011)年には、地域の生産者をまきこんで生き生きと運営していることが評価され「直売所甲子園2011」(全国直売所研究会主催)で、最優秀賞にあたる農林水産大臣賞を受賞。全国からの視察も増え、交流拠点としての役割を強めるとともに、カーボン・オフセット認証の取得など、新たな取り組みも進めています。

### Interview

#### 「道の駅から、八女市の応援団を増やしていきたい」 総務企画課長 森久栄さん



地元の人、物、伝統の力がすべて結集して「道の駅たちばな」が誕生しました。立花町には、豊富な食材とそのおいしさを引き出す料理法や保存法が伝えられており、何より

おもてなしの心があります。500人ほどの生産者によってスタートした直売所が、徐々にステップアップし、日本一の評価を得ることができました。若いスタッフが増え、地元の小・中学生の体験学習の場にもなっています。地元のおいしいものや元気な人たちを知れば、進学や就職であるさとを離れても、いつかは帰ってこようと

思うのではないのでしょうか。水害の際も、「私たちは八女のおいしいもので元気になったので、今度は八女の人たちを元気にしたい」と、市外の方からたくさん支援をいただきました。これからも地元の魅力を再発見し、市内外に「道の駅たちばな」と八女市の応援団を増やしていきたいです。

平成24(2012)年9月の「第52回林業研究グループ九州地区交換研修会」において、「星野村女性林研あいりん会」が最優秀賞を受賞。翌25(2013)年に行われた全国大会でも九州代表として発表しました。あいりん会は、平成11(1999)年に林業や山林に関わる女性たちにより結成された組織です。「全員が共同して何かをするのではなく、勉強会や他の女性林研との交流を活発に行い、個人の技術研さんを地域の活性化につなげることを願っています」と会長の西田裕子さん。会員各自、中山間地に適した野菜の導入、葉わさびの栽培、草木染め製品の製造・販売などの活動を行っており、西田さんは伝統的な製法での味噌作りを続けています。「一人で2トン作ったこともあり、全国大会で発表したら、このことだけでも最優秀賞の価値があると驚かれました」

### 個人の技術や夢を、地域活性化につなげる 星野村女性林研あいりん会 代表 西田裕子さん



西田さんは、森林インストラクターの資格も取得しました。「木の名前を調べながら池の山キャンプ場の周辺を散策するなど、山を傷つけたり、汚したりしないレクリエーションのかたちを考えていきたいです」。山を楽しむ人と守る人の橋渡しが、西田さんのこれからの目標です。





南朝ゆかりのそばを伝える交流拠点  
そば処 まんどき 代表 高山あけみさん

「そば処まんどき」は、日向神ダム近くの国道442号沿いの人気スポット。「まんどきそば」は、将軍そばとも呼ばれ、矢部村では古くから後征西将軍、良成親王を祀る「大杣（おおそま）公園祭」で振る舞われてきました。そば粉八割、割粉二割の二八そばで、地鶏やしいたけで取っただしが特徴です。

「地域の味をたくさんの人に食べてもらおうと、平成19（2007）年に開店しました。そばを伝えてきたお年寄りが高齢になり、伝承を途絶えさせてはいけないという

思いもありました」と代表の高山あけみさん。お店は地元の女性グループによって運営されており、元気なおばちゃんたちとの会話も一緒に味わいたいというリピーターが増えています。

そばのほか、季節のお惣菜や家庭で作った漬物も人気です。「矢部村は水が良いから、どんなものでも美味しい。気軽に立ち寄れる矢部村の道の駅として、これからも楽しみながら続けていきます」



伝統料理を掘り起こし、健康長寿に役立てる  
八女くろぎ食の文化祭 代表 宮園すみ子さん



「黒木町の食文化は本当に素晴らしい。食育が重要視される今だからこそ、おばあちゃんの手料理を若い人たちにも伝えたいと思いました」と代表の宮園すみ子さん。平成21（2009）年に始まった「八女くろぎ食の文化祭」は、伝統料理や家庭の味を持ち寄って試食するイベントです。

「もち米を使った保存食、鬼の手こぼしなど、私も知らなかった郷土料理も出品されました。素朴な味ですが、そのおいしさは若い人も分か



ると思います。いもまんじゅうやふなやきのような、今もよく食べられる郷土食でも、よその家庭のことは知らないの、味つけの情報交換をする良い機会になると思います」

テーマを決めたコンテストや講演会も行われ、商品化された料理もあります。「黒木町でも80歳を過ぎて元気の方は昔ながらの食生活を続けている方ばかり。これからも地元の伝統料理を掘り起こし、健康長寿に役立てていきたいです」



地元の食の智慧を生かした新製品を開発  
農産加工品グループ「野の花会」 代表 大坪廣子さん



農産加工品グループ「野の花会」は、地元の新しい特産品を作ることを目標に、上陽町の企画で平成15（2003）年に結成されました。町内各地から集まった10人の女性がアイデアを出し合い、翌平成16（2004）年、最初に商品化したのが「田舎味噌」です。「地元の伝統的な食文化をきちんと形にして残しておきたいという思いから、家庭で味噌を作っていた頃の素朴なおいしさにこだわり、地元のお米、国産大豆を使って作りました」

と代表の大坪廣子さん。薄味で添加物なし、安心安全な味噌として人気を呼び、市内外で人気の定番商品となっています。

平成25（2013）年には、郷土料理のぎすけ煮をアレンジし、大豆を揚げて砂糖醤油とみりんで味つけた「みどりちゃん豆」を商品化。現在、こんにゃくの田楽に最適な「練り味噌」の改良を進めています。イベントにも積極的に参加し、たまごや梅干しでほたるをイメージした「ほたる丼」など、新しい名物料理にも取り組んでいます。

